尋常小學修身書 巻二

吹二野
10
2

第十

仁門 10 號 2 卷

成就德器

國光社發行

文部省檢定濟

尋常小學修身書 卷二

伯爵副島種臣 閲
伯爵東久世通禧 著

東京 國光社圖書部

明治二十五年壬辰六月

侍從長勲六等伯爵徳大寺実則題

福岡藩図書館蔵

小學修身書巻之二

東久世通禧　著
副島種臣　閲

第一

○天皇陛下は、このくにを　をさめたまひ、われらを　めぐみたまふ　君　なり。つね　に、忠義

を　わするべからず。

○みゆきを　はいする　ときは、ばうしにりまきを　とりて、正しく、けいれい　すべし。

○御眞影　に　むかふ　ときは、行儀　正しく、かしらを　さげよ。ふけいの　ふるまひ　あるべからず。

○忠は、心の　まことなり。

○君の　ため　には、かならず、忠貞の　心を　つくす。九條師輔

常磐貞高

○高山彦九郎（タカヤマヒコクラウ）は、つねに、きみを　たもふ　心　ふかく、くにぐにを　めぐりて、忠義の　人々の

あとを　たづねたり。

○みやこ　に　入る　たびごとに、まづ、三條　の　はし　のうへに　ひざまづき、御所　の　方　に　むかひて、臣　高山彦九郎　と、ねほごゑ　に　まをしあげて、うやうやしく　はいしたり。

第二

○この　國　は、神　の　ひらき
たまひし　ところにて、われら
は、みな、神　の　子孫　なり。
○わが　身　は、父母　より　いで、
父母　は、先祖　より　いづ。神
は、父母　の　先祖　なれば、つね

に、うやまひ　たふとぶべし。
○國々　所々　の　神社　は、
天皇陛下　の　御先祖、又　は、わ
れらの　先祖　を　まつりし　所
なれば、かりにも、おろそかに
思ふべからず。
○わが　朝　は、神國　なり。神

を敬ふを朝野群載もつて、先とす。

後宇多天皇御製

○「あまつ神、國つ社を、いはひてぞ、わがあしはらの、國はをさまる。」

○神武天皇、日向國にましましし時、中國に、あしき。ものたぼくありて、人民をくるしめたり。

○天皇、いくさをおこして、これらをうちほろぼしたまひ、大和の橿原といふところに、宮をたて、ろこを、みやことしたまへり。

○ろのち、詔（ミコトノリ）したまひて、朕は、あまつ神の子孫なり。いま、國中のわるものども、こどごとくたひらぎたれば、先祖の神をまつりて、大孝をのべむとて、鳥見（ミ）山（ト）にて、みづからの天神をまつりたまへり。

第三

○父母は、われをうみ、われをそだつ。ありがたきひとなり。孝行して、しんぱいをかけぬやうにすべし。

○まいあさ、はやくおきて、口をすゝぎ、かほをあらひ、父母にあいさつして、ぎやうぎ正しく、しよくじすべし。

○がくかうに行くときも、がくかうよりかへりたるときも、父母にあいさつすべし。

○うみやまは、かぎりあり。父母のめぐみは、かぎり

なし。貝原益軒大和俗訓

○善は、孝行にすぎたるはなく、惡は、不孝よりたもなるはなし。中村惕齋姫鏡

○松平好房（マツダヒラヨシフサ）は、五つのころ、はじめて、東西南北の字をたぼゐてより、父母の名

ますはうがくにむかひて、足を いださず。

○人のことをは が、父母ねてをりても、なすときは、ねたきなほりてきけり。

○母のうばにて、きりやはりをみるときは、手づか

らしまひて、母の身にふれぬやうにせり。まことに、孝心ふかきこどもなりき。

第四

○兄弟、なかよくするも、孝行なり。けんくわをして、父母に、しんぱいをかけぬやう

にすべし。

○兄姉は、弟妹を、よくせわして、しんせつにせよ。又、弟妹は、兄姉のいふことにうむくべからず。

○兄弟あらぶときは、たがひに、れもしろくして、けがせぬ

やうにせよ。あやふきことあらば、たすけすくふべし。

○兄弟は、兩の手のごとし。諺草

○くちびるつくれば、齒さむし。本朝俚諺

○毛利元就（モウリモトナリ）、びやうきにて死な

んと　するとき、こどもらの
かず　ほど、矢　を　とりよせて、
手づから、ひとたば　と　なし、ち
から　を　いれて、折りたれ　ども
折れず。
○つぎ　に、たゞ　一本　とりて
折りたる　に、すぐ　折れたり。ろ

國學院大學図書館藏

國學院大學図書館藏

のとき、元就は、こどもらに
むかひ、兄弟も、この矢の
とほりなり。たがひに、なかよ
くして、一ッになれば、ちから
つよくて、なにごともなしうべ
しといひたり。
○まことに、兄弟けんくわを

するは、たがひに、一本の
矢となるなり。一本の矢
とならば、たゞちに折るべし。
これは、よきをしへなり。

第五

○父母は、われをやしなひ
そだて、先生は、われをし

へ みちびく。父母も、先生も、尊敬せざるべからず。

○父母、先生のをしふることは、みな、わが身のためなれば、よくたぼにて、わすれぬやうにすべし。

○學校にて、先生のをしへをうくるときは、ぎやうぎを正しくせよ。又、先生に、ものを問ふときは、ことばを、ていねいにすべし。

○先生のいひつけは、なにごとも、ろむかぬやうにせよ。先生のいひつけにろむく

は、不敬なり。

○一日の師も、たろうかにせず。童子教

○七尺さりて、師のかげをふまず。諺草

○中村明遠（ナカムラアキトホ）といふ人は、いとけなきときより、室鳩巣（ムロノキウサウ）を、

師と せり。

○鳩巣 死して のち、まいつき、忌日 には、かならず、そのいへにゆき、ていねいに、ゐはいを をがみて、ながく、をこたることと なかりき。

○たれも、この人の やうに、

先生を 尊敬 せよ。

第六

○父母 は、わが 身 の やまひをうれふ。養生して、やまひにかゝらぬ やうに する は、孝行 なり。

○熟せぬ くだものを 食ふべか

らず。酒、たばこをのむべからず。うまき物も、多く食ふべからず。

○病あらば、にがくともくすりをのむべし。

○病は、口より入る。本朝俚諺

○道にしたがひ、身を保ちて、ながいきなるほど、大なる福なし。貝原益軒養生訓

○宮崎筠圃（ミヤサキインポ）といふ人は、こどものときに、母が、せなかに、灸をすゑたるに、なきいだしたれば、母は、あつきかと問ひたり。

国学院大学図書館蔵版

○筠圃は答へて、あつくはあらねど、かりろめにも、はだへをろこなひやぶらぬは、孝のはじめなりとぞきけり。

○ろれに、わが身は、うまれつきよわくて、灸をすゑねばならず。ろれがかなしくてな

国学院大学図書館蔵版

くど　いひたり。

第七

○人は、學問して、才智をみがゝざるべからず。才智なくば、牛馬にたなじど。

○雲、雨などふるとも、學校はやすむべからず。まいあさ、し

よくど をはらば、學校に行く用意をすべし。

○學校よりかへりたるときは、その日に習ひたるところを、くりかへしよみて、わすれぬやうにせよ。

○玉も、みがゝざれば、光なし。

○實語教

○智をひらくことは、學問の功にあらずば、なりがたし。貝原益軒初學訓

○小川泰山（ヲガハタイザン）といふ人、七ッのとき、雪のふる日に、たほ笠をかぶりて、山本北山（ヤマモトホクザン）と

いふ師のもとに、書物をならひに行きたり。

○みちにて、雪が、笠につもり、たもくなりて、歩むことあたはず、つまづきたふれて、ひざをけがせり。

○往來の人が、あはれに

たもひ、たすけ　れこして、家に
かへれ　と　いへど、泰山　き、入
れず、足　を　ひきずり　ながら、
師　の　もと　に　行きて、書物
を　習ひたり。

第八

○父母　の　家業　は、よく　習ひ

て、をこたらぬやうにせよ。

家業は、身を立て、家をたこすもとゐなり。

○家業ををこたるときは、まづしき人となる。

○まいあさ、はやくたきて、さうぢして、父母のたすけを

せよ。あさねをすべからず。

○よく、家業をつとむれば、利禄は、もとめずして、その中にあり。貝原益軒家道訓

○あさたきの家には、福きたる。本朝俚諺

○あるゐなかのこども、比叡山(ヒエイサン)

にのぼり、さくらのさきたるに、風のふくを見て、なき出だせり。

○ある人、花のちるをみて、なくかと、問ひたるに、さくらのちるはかまはねど、我が父の作りたるむぎ

國光社藏版

國光社藏版

の花がちりて、みいらぬかと　たもひて、なく　といひたり。

○誰も、このこどもの　やうに、父母の　ことを　わすれず、家業を、たいせつに　思ふべきなり。

第九

○人は、とめると、まづ一きとに　よりて、わが　身のほどを　かんがへて、みだりにをごる　ことなかれ。

○たとひ、人は、よき　きものを　きたり　とて、己も、亦、きたし　とれもふべからず。父母

のきせたるものにて、まんぞく すべし。

○奢る者は、久しからず。和漢古諺

○上をみな。身のほどをしれ。近古史談

○綾部道弘（アヤベミチヒロ）は、をごりをこのまぬ人なり。ある日、人より、

うの子に、うつくしききものを たくられたり。

○されど、道弘は、うのきものを、子にきせずしていふやう、わが父は、一生、まづしくて すぎたまひ、われも、また、ひさしく しんくしたり。今は、

ふぢいう　なき　身　なれども、昔の　こと　をば　わするべからず

○すべて、人　は、をごり　には　なりやすけれども、倹約　には　なりがたし。われ、子　を　あいせぬ　には　あらねど、をごり　に　ならは　せぬ　ため　なり　と　いへり。

第十

○つねに、禮義を正しくし、立居するにも、ものいふにも、つゝしみを、第一として、決して、さわがしくすること勿れ。

○客のまへにては、常に、行儀を正しくせよ。又の來る時も、歸る時も、かならず、ていねいにあいさつすべし。

○人と、みちをゆく時は、人を、先にし、わたのれを、後にすべし。人と、席に坐するときは、人を、上にし、わたのれを、下にすべし。

◎心につゝしみあり、身にのりあるを、禮といふ。

貝原益軒家道訓

○人、禮あれば　やすく、禮なければ　あやふし。全上

○山本勘助（ヤマモトカンスケ）、ある時、小宮山助太郎、小山田八彌、秋山友市といふ三人のこどもに、話をしてきかせしに、助太郎は、しづかにして、よくきゝたれども、八彌は、わらひてさわがしく、友市は、たいくつして、たびたび立ちさりたり。

○勘助、この三人のやうすを

みて、助太郎は、たしかなる男なれども、八彌は、心さだまらず、友市は、不忠の名をのこさんといひたり。

○勘助のことばにたがはず、後に、助太郎は、武田勝頼のために、うちづにして、忠義

をつくしたれども、八彌はにげかくれ、友市は、てきにかうさんして、不忠の名をのこしたり。

第十一

○きみに、忠なるも、たやに、孝なるも、みな、誠の心よりいづるものなれば、人に、最も大せつなるは、誠の心なり。

○心に、誠なきものは、ろめなすところ、たとひ、よきわこなひのごとくみゆるも、眞のよきにはあらざるなり。

○誠を、本とし つとむるときは、何事にても、成らずといふことなし。万の成らざるは、いまだ、誠のいたらざるゆゑと思ふべし。

○よろづの事、誠を、本とすべし。貝原益軒初學訓

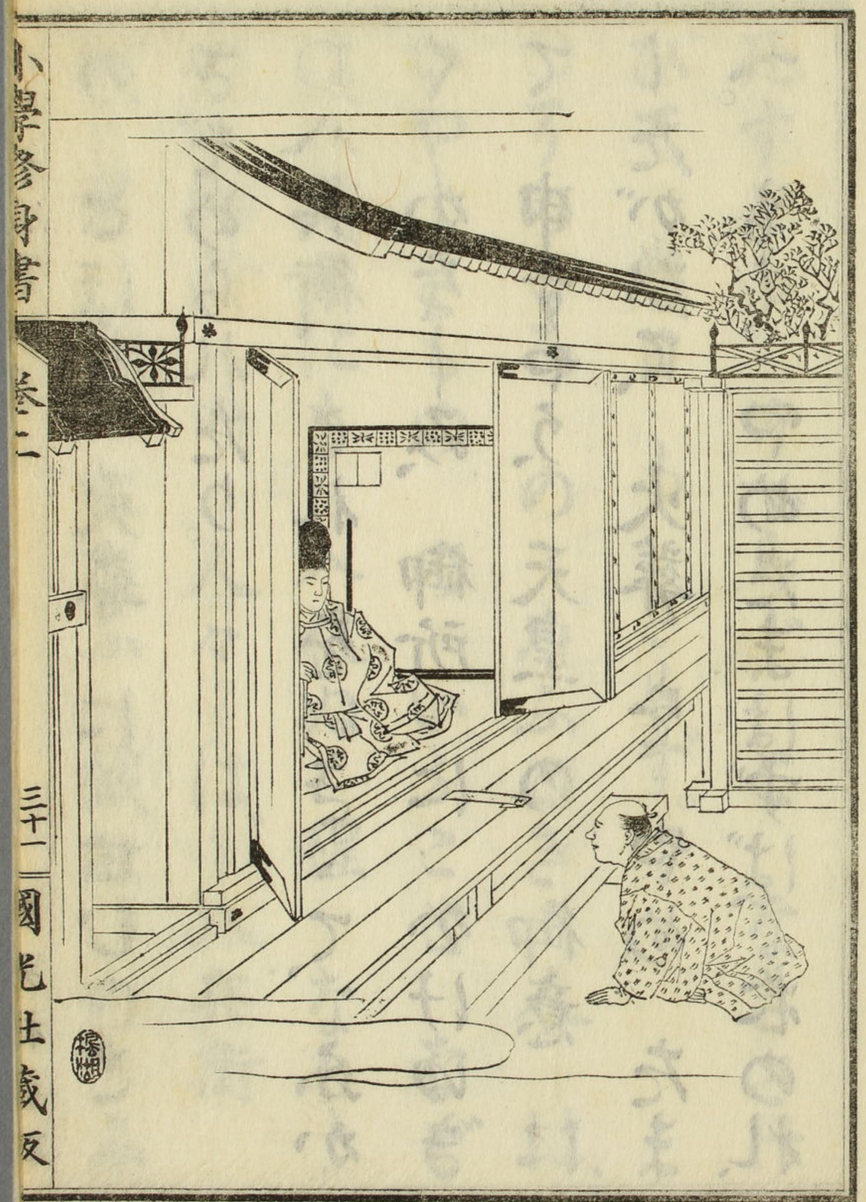
皇后陛下御製

○つくろひて、はなをさかせぬ、ことのはに、人の誠は、見ゆるなりけり。」

○後光明天皇の御代に、京都に、八兵衛といふものありて、御所に、うを上ることを業とせり。

○天皇は、御智慧すぐれ、あはれみふかくましくて、常に、火葬をきらひ、これをやめむと志したまへり。

○さるに、ろの事ならずして、かくれさせたまひければ、御所の人々は、このたびも、まへ



のとほり、火葬にせむと
さだめられたり。
○八兵衛、これをきゝて、ふか
くかなしみ、御所にかけゆき
て申すやう、天皇の御意に
したがひて、火葬をやめたま
へ。もし、やめたまはずば、たのれ、

死すともかへらじとなきさけ
びて、幾日もさらず。
○ろのころのたふとき人は、
いやしきもののいふことなど
は、耳にも入れぬ程なりし
が、御所の人々は、八兵衛
が、君をたもふ誠心のふ

かきにかんど、つひに、一たび
とりきめし火葬をやめたり。

小學修身書巻之二終

明治廿五年六月十五日印刷
仝　七月十三日出版
明治廿六年八月十三日訂正再版印刷
仝　八月十七日訂正再版發行
定價金七錢八厘

著者　伯爵東久世通禧
東京市麻布區本村町百八番地

發行兼印刷者　西澤之助
東京市京橋區築地二百廿一番地

發兌　國光社圖書部
東京市京橋區築地二丁目廿一番地

版權所有